慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	露国革命の根本思想
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.2 (1918. 2) ,p.292(136)- 307(151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180200-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

露國革命の根本思想

占部白太郎

（一）過激派政府の運命（二）虚無思想の萠芽時代（三）虚無主義の形成時代――バクニンとチェルニッシェヴスキー（四）虚無主義と實際政治（五）露國革命と佛國大革命

一

露西亞のレーニン、トロッキー等過激派政府が果たして中歐同盟國と單獨講和を遂げて、露國をして戰局より無事脱退せしめ得べきか、ケレンスキー一派の假政府側若くはミリュコッフ、ロッジャンコ等の立憲民主黨の復活し來つて聯合諸國と協同作戰を再起するに至る可きか（露國戰線の目下の狀態では此事殆ど絶望に見ゆるけれど）、抑〻又ロマノッフ朝の復興して各州夫れ〳〵獨立を宣して支離滅裂の狀態に在る大露西亞が復び帝制の下に支配せらるゝに至る可きか、革命の潮流の急激にして變轉の旦夕を測られざる露國現下の形勢を以てしては何人と雖其の將來に對して的確なる判斷を下し得ないであらう。露國が今後如何なる政府の下に統治せらる可きやはこれを將來に兆するの外はないけれど、唯だ一事の確固たる豫見を爲し得らるゝものがある。其れは何であるかと云へば、露國今後の政體が縱令何種に屬するにせよ、其の政治が民主々義であらねばならぬ事である。芬蘭もウクライナも既に獨立を宣言したが、東南地方や亞細亞露西亞も獨立を遂げて從來の大露西亞が解體して、各民族夫れ〳〵欲する所の政府を組織するにしても其の政體は從來の如き專制政治若くは半專制政治でないことは勿論である。縱しロマノッフ王朝が復興するとしても是迄通りの獨裁的官僚政治を維持することは斷じて出來ない。

露國人は久しくロマノッフ朝の專政の下に支配せられ來つたけれど、其の多くは元來不羈獨立なる遊牧人種の子孫であつて、最も自由を愛する國民である。昨年三月革命が突如として勃發し、さしもの專制政府も朽木の如く倒れたので、多年專政の桎梏に苦しむだ露國民衆の喜悅これに過ぎるものはなかつた。然し革命は成功したけれど、戰線に於て露軍は敗退に敗退を重ねた。ケレンスキーはディクテートルの權力を用ひて連りに國民の勇奮を促したけれど、一たび桎梏を撤せられた露國の兵卒は最早殆ど全く戰意を喪失して戰況は益〻不振に陷つた。縱し帝政が倒れなかつたとしても、夙に獨墺と單獨講和が成つて居たかも知れなかつたけれど、レーニン等過激派の手に依つて、休戰が行はれ續いて單獨講和が結ばれむとする以上は、彼等が聯合與國に對する背信の責を負ひ、世界呪詛の標的となるのも、己むを得ないのである。既に兵士に戰意なく、民衆には飢寒迫り、兵器軍需品亦不足せる露西亞が今日の不體裁なる境遇に陷るのは、固より其處であるけれど、是れ偏に露國民衆が間違つた『自由』に禍せられた結果に外ならぬ。幾度か革命を企てゝ毎時失敗に畢つた露國人が今度は辛つと目的を遂げたので、彼等は其の贏獲たる自由をば復び剝奪せられざらむが爲、兵士も勞働者も死刑の復古や、上官の指揮權の回復を贊成せぬのである。露國は訓練なき兵士を要せずと稱して、折角の米國兵士の來援を謝絶したる露國人は、今や自由と放縱とを履違へて國家の滅亡せむとするを餘所に見て連りに狂愚を演じつゝあるのである。未だ自由を適當に享樂する資格なき無智なる露國民衆は實に憐れむ可き人民である。世に絶對なる自由と云ふものが有り得べき道理はない。制裁のない社會は無政府である。國家に秩序と訓練とがなければ、其の國家は滅亡するの外はない。無

智蒙昧なる露國の民衆は今やこの絶對なる自由を欲求し、制裁も訓練も秩序もない國家社會を夢想して居る。虛無黨が多年宣傳し來りたる無政府主義は、今や露國民衆の間に猖獗の勢を逞うして、過激派政府は土地を分配し、財產を剝奪し、勞働者は白晝公然劫掠を恣にして中以上の社會は唯だ袖手傍觀するの外策なきの狀勢である。吾輩は過激派政府が長く權勢を維持しやうとは信じないけれど、縱令何種の政體が今後露國に確立せらるゝにせよ、是等過激派の主張が全然棄却せられやうとは、齊しく信ずる能はざる者である。露國の政體が民主政治の色彩を濃厚にす可きことは疑ふ可からざると共に目下勞兵會（"Soviet" or Council of Workmen and Soldiers' Delegates）の主張する虛無主義の政策が幾分露國の政治に加味せらるゝに至る可きは殆ど疑なき所であらう。露國に於ける革命運動の顚末を述ぶることは到底この一小編の企て及ばぬ所であるとして、左に虛無主義の由來及び其の主張の一斑を略叙し、其れが露國の政治に何程の影響を與へたかを考覈して見やうと思ふ。

二

虛無主義の敎義が露西亞に於て初めて一定の政治的顯象となるに至つたのは、アレクサンドル二世の治世、殊に伯林公會後の事に屬するけれど、かゝる思想が露國に流入したのは、其の以前の事である。露國に於ける諸他の思想と均しく、虛無主義も亦西歐羅巴から輸入された。虛無主義は最初第拾八世紀の佛蘭西革新文學者の腦裡に兆したものであるが、其れは獨逸思想の蒸溜器を滲過したので、ヘーグルやシェリングやルドウィヒ・ビュッヒネルの敎理中には微かに其の印影を留めて居る。此の新らしい敎義が露國の諸大學に傳はるや、其の獨逸に於けるよりも却つて繁殖の度の速かつたと云ふのは、當時獨逸の政治は他の產業や藝術の進步に比較して不振の狀況に在つたからである。此種の思想が露國に蔓延したる速度の速かつたのには、種々の理由がある。露國人の大部分を形成するスラヴ民族は著しく多感的人民である。酷寒の爲一年の殆ど半ばを籠居に送る彼等の間に、自ら或は默想に耽り、我は肉慾主義の習慣の發達するはスラヴ人の俚謠の悲哀なる調子、露西亞文學に屢〻見る厭世觀、及び農民の間に火酒を飲むの慣習等に依つて證明せられて居る。露西亞人の氣質と露國の氣候とは自から露國人をして生活の困難と籠居の不愉快から免れむが爲、理想に向つて奮鬪せしむるに至つたのである。憂鬱とヲツカ酒は畢竟其の結果である。夫れから此の如く多感にして而かも衝動的なる露國人は、世にも怖ろしい專制政治の桎梏に苦められて居つた。露國の專制政治が時に弛張があつたけれど、概して其の臣民殊に下級の農民、勞働者に對する壓虐の如何に酷烈であつたことは、玆に呶々するを要せぬ。這般の專制壓虐に呻吟する露國人の間に虛無主義の如き隱險苛烈なる思想の歡迎せらるゝは敢て怪むに足りない。

露國に於ける虛無主義の思想の發達を叙述するに先ちて、此の語の由來を說明するが便利であらう。虛無主義(Nihilism)なる語は露國青年記者崇拜の標的であつた有名なる小說家ツルゲニエフ(Turgeniev)が、Fathers and Children の中に科學的及倫理的の說明に適用したのが嚆矢である。(佛國ではプルードンの學理を說明せむが爲夙に用ひられて居た)。彼は舊露西亞の宗敎的信條及び家長制度的慣習に反對する個人の謀叛を表現せむが爲、何氣なく此の語を使用したのであるけれど、忽にして露國では惡い意義の通語として流行するやうになつた。ピッザーレフと云ふ名高い記者は連りに名譽の語として、此の言葉の尊敬せられざる可からざる事を公衆に向

つて證明したけれど、一向其の效がなかつた。而してステプニャックと稱する匿名の學者はUnderground Russiaと稱する書中に、「虛無主義の根本原理は絕對的個人主義であつて、其れは個人の自由の名に於て、社會に依り、家族生活に依り、又宗敎に依りて、課せられたる凡ゆる義務の否定である」と說明して居る。

虛無主義が露國に發展するには明かに左記の三個の階段を經て來たのである。

第一階段は謂はゞ空想時代で、虛無主義は未だ一定の敎義として形を成さなかつた。ニコラス一世の專制政治は殊に酷烈を極め、有ゆる手段を用ひて思想界を束縛したので、心ある者は言論の自由を得むとの背叛を企てたけれど、未だ實際政治とは關係を有するに至らなかつた。露國人の間に於ける知識階級は露國の改革を希望したけれど、彼等は西歐に於ける文明の進步を以て幾百年の歷史的迂餘曲折を經來つて隨つて其等の改革に幾多の失敗が伴つて居る、露國をして一躍西歐諸國を凌駕する程の富强國たらしむる捷經は西歐に於ける最新科學を應用して大仕掛なる社會的乃至政治的革新を圖るに如くはないと、妄信したのである。仍て是等改革熱心家の間に先づ讀まれたのは、實證主義(Positivism)の開祖オーキュスト・コムト(August Comte)の著書であつた。彼は科學を分類して、如何にして人間社會を科學的原理の上に組織す可きかを敎る社會學を以て學問の柱石として居る。露國はコムトのCours de Philosophie Positive中に委細說述してある原理を唯だ採用すれば宜しい。彼は同書の中に人間が知識的發展の三階段—宗敎的、哲學的、實際的—を通過せねばならぬ事、並びに世界の最も進步したる諸國民は第一第二階段の進步に數世紀を費したる後、今や第三階段に進みつゝある事を說明して居る。故に露國は出來る丈け速に此の實際的階段に達せねばならぬのであるが、露國には或る人種學上及び歷史上の特質の結果として諸他の國民よりも一層急速に這般の進展を遂げ得ることを信ず可き理由があると、彼等改革者は信じたのである。コムトの著書に次ぎて暫くの間最も人氣のあつたのはバックルの文明史であつた。是は同書が歷史と進步とを單に統計の事として取扱ひ、而して進步は常に神學的敎條の勢力に反比例するものであるとの原理を述べたからである。此の原理は非常に實際的重要のものとせられ、是れより抽出されたる結論は、宗敎と神學の勢力だに破壞せらるれば、國民の急速なる進步は確實であると云ふに在つた。ジョン・ステュアート・ミルも亦極めて人望があつたと云ふのは、彼が人道と婦人の釋放に對して熱心であつたのと、其れからUtilitarianism の中で、彼が道德と云ふものは、最大多數の最大幸福に貢獻す可き幾多の時代の經驗の結晶に過ぎないと喝破したが故である。夫れから獨逸の學者殊にビュッヒネル等の著書が讀まれたことは前に述べた如くである。

此の如く是等西歐學者の著書は露國の知識階級の間に行はれ、又嚴重なる官憲の檢閲にも拘はらず、革命を皷吹する月刊雜誌等も現はれたけれど、要するに是等の先覺者と雖、西歐の文明に對して一知半解の生喫りに過ぎずして、彼等は其の論議する事柄に對して明確なる了解を有たなかつたのである。隨つて彼等の言論は政府の急所を突くの患なく、官憲に於ても干涉を加へはしても衷心から之を怖るゝ程ではなかつたのである。否、露國政府者は是等の改革運動を恐れなかつたのみならず、一八六〇年代に於ては政府側の中にも改革運動が行はれて、一八六一年に於けるアレクサンドル二世の農奴解放の勅令や、一八六四年に於ける地方議會(Zemstvos)權限擴張の上諭を見た程である。然

し是等の改革も人民の滿足を買ふに足らず、反つて不平苦情を誘起（其の原因は本題の外に屬するが故茲に述べない）したので、政府は又も以前の虐政に復歸したのである。

三

上述の如きコムトの實證主義やミル及びバックル等の功利的個人主義の思想は、源を佛國に發し獨逸を通過して流入したる一種の破壞思想と露國に於て相融合し、其の陰鬱的なる環象に育成せられ、軈て露國的特性、モスクワ的特色を帶びたる別種の思想を形成するに至つた。階級制度の壓虐に反抗し感情的分子に富める佛蘭西革命の系統を傳へた破壞思想は英國流の科學的實際主義と化合して、最早從前の如きアカデミックな空疎なる思想ではなかつた。即ち露國の虛無思想は第二階段に入つて一定の形式を具するに至つたのである。而して此の第二期を代表するはバクニンとチェルニッシェヴスキである

露國虛無主義の始祖はバクニン(Bakunin)と稱する富裕なる地主である。然し、バクニンは佛國人プルードン(Pruhdon)から此の思想を繼承したのであるから、彼は此の疑はしき名譽をプルードンと分たねばならぬ。一八一四年に生れたバクニンは恰もニコラス一世が嚴酷なる壓制の治世に當つて、實際生活に入つたのである。露國の官僚政治に不平であつた彼は少時より熱心に西歐の哲學殊にヘーゲルの著書を耽讀した其の巴里に居つた間、深くプルードンの『財產は盜品なり』との信條に心醉して之を祖述した而して一八六九年彼は社會黨の大同盟を組織して有ゆる政府に對する十字軍を起さむと準備したのであるが、是れは頓て有名なる萬國社會黨（"Internationale"）に合同せられた。佛國から遂はれ、中歐帝國から遂はれて、彼は結局母國に引渡され、西比利亞に流謫せられたが幽處から日本に逃れ、英國に來り、最後に瑞西に定住した。

彼が倫敦に在つたとき Kolokol と稱する同じく露國の亡命者ヘルチェン(Herzen)の機關紙に助力したが、彼の勢力の下に同誌は從來よりも一層過激なる戰鬪的信條を唱道するに至り、其の獨特の嚴しい論法は、露國青年の熱烈なる改革心に愬るものがあつた。バクニンの說に據れば、人類の幸福は有ゆる現在の制度を破壞す可き火山的大破壞を必要とする。政府も、法律も、財產も、特權も一切地球の表面から一掃せられねばならぬ。何となれば、舊事物の一分子たりとも殘存するならば、其れが反動革命の種子となるからである。是等の亂暴なる理論はバーゼルに於ける虛無黨の大會で、一層具體的になつたのである。Kolokol は嚴重なる官憲の目をくゞつて多く露本國に輸入せられた。夫れからバクニンが虛無主義者として最も活動したのは、瑞西に在る間であつた。此處に亡命し來つた幾多の露國青年男女は、彼の手に依つて無政府主義の洗禮を受けたのである。又彼の著書演說は墺地利、波蘭、露西亞のスラブ人の間に國民的精神を喚起し、是等の民族に壓虐を加ふる各自の政府を顚覆す可き義務の感念を刺戟したる力、頗る大なるものがあつた。

プルードンの場合に於けると均しく、バクニンが虛無(non-existent)を欲して實在を惡むの熱心は、多くの藝術、文學、科學の結果をも彼の一括的呪詛の目的とするに至つて、殆ど狂氣に近かつた。然るにも拘はらず、彼の破壞思想は、其の間に多くの細かき相違こそあれ、何れも壓制を惡み各自の向上心を有する點に於て一致する凡ゆる多感なるスラヴ民族間に小なからざる勢を及ぼしたのである。

バクニンに次ぎて露國に虛無主義を鼓吹したるは、チェルニッシェヴスキー(Chernishevski)であつた。彼は帝國內に青年露西亞(Young Russia)と稱する秘密結社を設立し、倫敦及びジュネー

ヴに於ける虚無主義の同志者と氣脈を通じて居た。彼はContemporaryと稱する雜誌を發行して居たのであるが、一八六二年農民の間に煽動的小冊子を配布したる廉を以て、十四年間西比利亞に追放の身となつた。彼はペトログラードの要塞に未決囚として禁錮中官憲の許可を受けて著作し、其の檢閲を經て "Shto dealt ? (What is to be done ?)を出版した。此の書は最初無害なる著作として看過せられたのであるが、其後に至つて浩瀚なる虚無主義文學中、最も影響を後世に及ぼし、且つ最も有害のものとせられた。小説としては、何等藝術的價値を目的としたものではなく、平常の時に出版せられたならば、多く世間の注意を惹かなかつたであらう。然も當時知識階級の間に懷かれたる茫漠なる社會主義的共産主義的思考の多くを具體的に現はしたるものとして、青年改革者の間には新たに發生したる信仰の一種の非公式なる宣言書と認められるゝに至つた。此の小説は二部から成つて居る。上の卷では傳統的慣例を公々然否認しつゝ新奇の思想に隨つて生活する學生の一團を記述し、下卷では佛國の社會主義者フリエーが提唱したる共産主義的原理に據つて組織せられたる村の光景を描て居る。上卷は新時代の曙光を示すもの、下卷は虚無黨窮極の目的を現はしたものと想像せられた。官憲は後にこの書籍の發行を許可したる過失を發見して、直ちに之を押收して發行を禁止した。

チェルニッシェヴスキーはバクニンよりも虚無主義の運動を一段進歩せしめた。彼は即ちバクニンが宣傳した現在の制度に對する憎惡心に更らに社會主義を接木したのである。彼は露國の社會に就て勞働の組織を與へ、而して富を均分す可き新社會の萠芽を認めたのである。此の如くして、虚無主義運動は其の發展の第二期を完成した。第一期に於て空漠なる哲學であつた虚無主義は、此に至つて政黨の綱領となつた。虚無主義は即ち思索の領分から脱却して、實際政治の領分に入つたのである。

四

既に第二階段に於て一定の形式を具したる虚無主義は、第三期に入つて其の主義をは實際政治の題目たらしめむと活動するに至つた。ルソーやヴォルテールの天地は一轉して、マラーやダントンの舞臺に入つたのである。

バクニンやチェルニッシェヴスキーに依つて宣傳せられたる虚無主義は、深く熱狂なる青年男女殊に醫學生の思想に浸潤し、彼等をして現在の社會を顚覆して最も進歩したる社會的平等と共産主義とを基礎としたる新奇なる社會組織を建設せむとの運動に着手せしめた。大革新運動の第一着歩として、從來の髮飾に反抗せむが爲男子は長髮を蓄へ、女子は髮を短く切り而かも綠色の眼鏡を用ひた。彼等が所謂ボヘミアエズムに得々たりしは寧ろ憫笑に値するに過ぎなかつたけれど、是等の虚無主義運動の愛嬌ある反面には頗る眞摯なる他の反面があつたのである。是等の熱狂なる青年男女は、曾に服裝の點に於て從來の慣例に反抗したるのみならず、最も激しく虚僞や僞善や常套語の慣習に反抗した。彼等は社會の先輩が會話及び文學上に於て露國の社會的及び政治的組織の缺陷を慷慨しながら其の改革の實際運動には一指だも染めない事―殊に富裕なる地主等が不幸なる農民から誅求したる收入にて贅澤なる生活を送りつゝ尙文明、教化、正義に就て言議する微温的態度に就て最も强い慊焉の情を見はした。彼等が實利主義に偏するの餘り藝術的教化を排斥して、自己の職務に忠實なる靴工はシェクスピヤやグーテよりも偉人である、何となれば人間は劇や詩よりも靴の方を必要とするからであると推奬せしに至つては、甚だしい誇張と云はねばならぬ。

此の如き奇矯の言行は自から一般社會の惡感を招いたが、更らに俗流を驚倒したのは、彼等の言論の如何にも極端過激にして到底實行の不可能なる事であつた。是等青年男女は平生濫讀の經驗に依つて、社會の害惡の多くが拘束なき男女の情慾と利慾とに直接間接原因することを發見したので、結婚及び私有財産の舊式なる制度を廢止して罪惡と悲慘の是等二大原因をば、全然排除しやうと提唱した。彼等は論じて曰く人性の凡ゆる健全なる本能が完全にして拘束なき滿足を與へらるゝやうに社會が組織せらるれば、罪惡や不善を行ふ可き何等の動機も誘因もないであらう。幾千年に亘つて人間は間違つた方向に進行して居たのである。世界の宗教的乃至民政的立法家は自然科學や實證主義的方法を知らないで、普通に法律及び道德と稱せらるゝ諸制度を立てたのであるが、是等の法律も道德も全然人間の性質に適合しない。然も官吏や道德家は男女をして是等に適從せしめやうとて或は强制し、或は勸說することに努めて居るけれど、彼等の努力は、最も著るしく失敗した。警官は脅かし罰し、僧侶は說教し諫言するけれど、些かも其の效なく、人間の本性は徹頭徹尾且つ頑然と此の不自然なる束縛に背叛し、尙背叛しつゝある。故に今が新しい組織を試す可き時機である。古來の習慣に從つて、男女をして宛も甚く着心地惡く健全なる筋骨の働を妨ぐるが如き身體に合はずして彈力のない衣服を强いて被せしむるよりも、何故着物をして人體の解剖及び生理に適合せしめないであらうか。左すれば着物は最早破るゝ患なく之を着たる者も、滿足し且幸福であらう云々。

要するに、是等男女青年の主張はバクニンやチェルニッシェヴスキーの教義を祖述したものに過ぎないけれど、彼等が其の主義を實際政治の上に適用せむとする運動の方法たるや、極めて大膽で然かも彼等が殉義の精神の熱烈なるには一般社會も多少動かされない譯に行かなかつた。以下彼等の實際政治界に於ける運動の一般を極めて簡單に叙述する。

一八七一年巴里自治團の破壞黨が一時的成功を博したる事が、露國の虛無主義者に非常の刺戟を與へた。無政府主義的運動は一層戰鬪的となり、極端に其の主義の宣傳を行つた。官憲の干涉が嚴酷になればなる程青年男女の行動は一層險峻苛烈の性質を帶びるやうになつた。然し此の時まで未だ陰謀や殺害の甚だしきには至らなかつた。虛無主義がいよ〳〵兇暴政治(terrorism)の手段を採るに至つたのは、露土戰爭の結末以後の事である。露土戰爭は異教徒たる土古耳人の壓虐に苦むで居た巴爾幹に於けるスラブ同胞の束縛を解放しやうと云ふ、露國側から云へば一種の神聖戰爭であつた。所がサン・ステファノ條約は伯林公會で英、墺、獨の干涉によつて、夫の如く無殘にも改訂せられて、露國の獲る所は幾何もなかつた。剩へ露國每時の戰爭に見るが如く、官吏の腐敗と無能とは各方面に於て暴露せられた。此の國家的醜辱に對する虛無主義者の憤激は、一方に於ける汎スラブ主義者の攻擊と相待つて、アレクサンドル二世の政府は、多少民論に傾聽して、改革を企てない譯には行かなくなつたのである。アレクサンドル二世がメリコフの獻策を用ひて改革の上諭を發布せむとした（上諭發布の少し前に帝は弑せられた）るは、其の結果であつたのである。

此の時頃から一個の公黨に發達せむとして居たる虛無主義者は、兇暴主義者(terrorists)てふ絕望的なる隱謀家の仲間に墮落した。而して彼等の武器はダイナマイトとナイフであつて、其の合言葉は恐怖(terror)であつた。其後彼等の運動は學校となく、軍隊となく、工場となく、農村となく到らぬ隈とてなかつた。前述の熱狂なる

青年男女は種々の變裝を凝らして、或者は農夫に扮し或者は勞働者に伍し、或者は敎師や兵卒となつて、無政府主義の皷吹に努めた。愚昧ながらツアールに忠義の篤き農民等は生白ろき手の所有者たる是等青年改革家の勸說を容易に承服しなかつた。然し當時の諷刺小說の一に現はれたる一小話は、彼等の運動の如何に熱心であつたかを語つて居る。一少女が母に語つて曰く

「阿母さん！今度來たマリア・イヴアンナと云ふ女敎師は神樣もなければ皇帝もない又結婚することは間違つて居ると敎へましたよ！」云々

此種の事件が露國の社會を戰慄せしめた事は非常であつた。然かも彼等が極端苛烈なる兇暴主義を行ふに至つたのは、實に已むを得ざる理由があつたのである。前述の如く元來虛無主義は國家の壓虐、希臘敎會の固陋其他一切の道理に反する傳說や根據のない僻見に對する知識的乃至道德的謀反であつて、最初は平和的手段に依つて、徐々と代議政治を露國に建設す可く人民を敎育せむと運動したのであるが、政府は苟くも新思想を皷吹したる者をば宛も殺人者の如く酷遇し、啻に集會結社を許さざるのみならず、凡ゆる言論の機關を停止するのであつた。仍て虛無主義の過激派に取つては、自分等が惡事を行はむが爲、祖國をして永久闇黑の世界たらしめむとする殘酷で併かも腐敗したる壓制家の巢窟たる政府に對して宣戰を布告するの外、採る可き途がなかつたのである。彼等は論じて曰く官僚の惡行を暴露し政府を脅嚇し、激烈なる報復行爲を演じて世界の耳目を露國の戰慄す可き狀態に集注せしめねばならぬと。即ち改革者の一部が兇暴主義者となつたのは、墮落したるが爲でも又は血に渴したるが爲でもなく（是等青年男女の中には貴族及び良家の出身が多かつた）眞個恐る可き壓制の下に呻吟して居る母國を救濟す可き他の方法がなかつたと信じたから

であつた。

政府は兇暴政治に對抗するに兇暴政治を以てした。虛無黨が幹部の秘密會議に於て死刑を宣告したる當路の大官を頻次に殺害したり或はダイナマイトを用ひて宮殿を破壞したり、鐵道を爆破したり兇行の限りを盡せば、政府に於ても警官、憲兵を驅使して虛無主義者を捕縛して、其の重きは死刑に處し、他は西比利亞の曠野に追放すること、年々萬を以て數ふるに至つた。然るに虛無黨員が一八八一年アレクサンドル二世を弑害したる一事は、痛く彼等に對する世間の同情を喪失せしめて、アレクサンドル三世の治世中、彼等の運動は下火となつた。ニコラス二世の治世にもフオン・プレーエの虐政の下に虛無黨は甚く迫害せられたが、彼等の兇行は決して跡を絕たなかつた。日露戰爭直後の革命は表面立憲民主黨の事業であるけれど、其の背後に虛無黨のあつた事は云ふ迄もない。此の如くして昨年三月革命が勃發し幾度か騷亂を經て、虛無主義の勞兵會は、遂にケレンスキーの手から露國の政權を奪取するに至つた次第である。

五

繰返して云ふ、露國の大革命が何邊まで發展す可きやは今に於て豫見は出來ないけれど、反動の潮流が猛然として湧起し勞兵會を後援とするレーニン等過激派政府が早晩顚覆す可きは、凡ゆる革命の歷史に徵して明白である。革命に際して徹底的の決意と勇氣とを有する過激派が結局一時の勝利を制することは、第十七世紀に於ける淸敎徒の革命、又は佛國第一次革命の證明する所である。佛國の革命に於ても、一時は破壞思想が猛威を逞うして、敎會及び貴族の財產を沒收するやら、基督敎を廢して、道理崇拜敎及び自然神敎の禮拜を行ふやら、其他凡ゆる大革新は續々斷行せられた。然るに其の中の穩健にして時弊に適中したる改革だけは永續したけ

れど、餘りに極端過激なるものは幾もなくして悉皆烟火の如く消滅して了つた。露國に於ても過激派政府が遂行せむとするが如き土地の分配財産の剝奪、公債の廢棄等の虚無主義的政策が實際に成功して、無政府主義者が理想とするが如き賤民の天下が永續しやうとは、何うも考へられない。

夫れから露國今次の革命を佛國第一次革命と比較して結局ナポレオンのやうな軍事的獨裁官の出現を期待して居る者もあるやうだけれど、是れは歴史の教訓を忘れたる謬見である。第拾八世紀末に於ける佛國は歐大陸中最も進歩したる國で、佛國革命の三大主義たる自由、平等、博愛の思想は廣く歐洲諸國を風靡した。ナポレオンが夫の如き驚天動地の大勝利を一時獲得したのは、畢竟此の革命思想をば劍戟の力を以て諸國民の間に傳播したからである。バルミーの戰に於ける墺普聯合侵入軍の頓挫を以てゲーテが世界歴史轉回の一大危機であつたと叫むだのは、軍隊の侵入は擊退せらるゝけれど、思想の侵入は如何ともする能はざる眞理を道破した千古の名言である。所が第二十世紀の露國は世界の強國とは云はれやうが（現下の露國は決して常態でないこと勿論である）、文化の點に於ては世界の劣等國の一つに數へねばならぬ。露國が世界の進歩に貢獻したる所は極めて少ない。革命時代の佛國とは正に反對で、思想界に於ても却て獨逸其他先進國の侵入を受けて居る狀態ではないか。露國は從來軍事上に於ては世界の強國として恐れられて居た。從つて今次大戰の初期に於ては多少の戰利を獲たけれど、戰爭は結局國家の資源と國民の愛國心及び文化の程度如何に依つて勝敗が決するのであるから、物質的にも精神的にも劣等なる露國が戰局長引くに連れて今日の如き大敗北を見たのは正に其處である。レーニン、トロツキー等過激派が現下の露國に於て優勢なるは、恰も佛國革命に於けるロベスピエールやサンジュスト等の山岳黨が一時政權を掌握したやうなもので、頓て反動の起る可きは豫想し得らるゝけれど、佛國革命に於けるが如く、ナポレオンの出現を期待するは、不當の觀察であらう。反動の潮流に乘じて、後ろに武力を控へた英雄が出現して、亂麻の如き露國の時局を收拾するの期は來るであらうが、其れは清教徒革命に結末を與へたモンク將軍か、普佛戰爭後巴里自治團の内亂を鎮壓したるマクマホン元帥以上の人物ではあるまいと思はる。露國の革命は吾輩が多大の注意を以て觀察す可き今度の大戰に因つて生じたる現象中世界に及ぼす影響の最も大なる出來事である。（完）